
赤い双剣

Nazzon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い双剣

【Nコード】

N4919C

【作者名】

Nazzon

【あらすじ】

二本の剣を自由自在に操り、「世界最高決戦」を制したスーパースター、ネンシー。彼女には多くのファンがいたが、突然現れた伝説の戦士カルメンの息子、ミルキスによって、大変な事態に…一方、”奴”と言う名の強力な存在。その正体は？…

第一話：世界最高決戦

「パンパカパーン！」

音楽が高らかに鳴り響き、観衆のざわめきが会場を埋め尽くしている。ここは、メッシルム王国最大のスタジアム、「メッシルム・スタジアム」である。観客席はゆうに5万席あるにもかかわらず、そのすべてを観衆が埋め尽くしており、立ち見している人も大勢いる。

メッシルム王国はここ、ネイロム星最大の国であり、この星で最大のイベント「世界最高決戦」の会場にもなっている。

この大会は世界各国から選り抜かれた戦士達が参加しており、世界でもっとも注目度の高いイベントとなっている。そして、地球とは異なり、素手で戦う者は稀で、ほとんどが剣術や魔法など、多彩な技を用いて戦っている。

そして、ルールはいたってシンプル。下の三つしかない。

その一：死亡するかギブアップするかで試合終了となり、相手の勝ちとなる。

その二：対戦は必ず1対1で行う。

その三：観客に危害を加えてはならない。
もちろん、ルール違反者は即失格となる。

この大会で優勝すれば、国民的英雄として称えられ、兵役や納税の社会的義務の免除はもちろん、一流の生活をただで満喫することが可能。

しかし、負けると死ぬか、運よく生き残っても深手を負うことは避けられない。

そう、この大会は競技者の人生を掛けたものなのだ。

練習用の人形にざっくりと切りつけ、それを蹴り飛ばす。人形は

吹っ飛び、向かいの壁に激突した。

彼女は肩で息をしながら二本の剣を鞘に収めた。百体目。

彼女の名はネンシー。この大会を五連覇している、無敵のチャンピオンだ。この星でも地球と同じく男性の方が女性より運動能力に恵まれている訳だが、ネンシーはほとんどの男に力で勝っている。彼女が得意とする剣の前に生き残る者はいない。

今回もそのはずだ。

突然、スタッフが部屋に入ってきた。

「ネンシー様、試合でございます。」

彼女はほくそ笑んだ。私の時間だ。

「分かった。すぐに向かう。」

「さあ、やって参りました！我らが無敵の女王、ネンシーです！」

観衆からの轟くような歓声とともにネンシーは入場した。相手は男。身長はゆうに２メートルを越えており、逞しい両腕には一つずつ斧が握られていた。

それに比べてネンシーは１６５センチしかなく、一見か細そうな両腕には剣握られている。この勝負は一見相手の男に分があると思われる。

しかし今回は別だった。

試合開始の合図とともに彼女は前に飛び出した。男は斧を振り回し、切りつけようとした。しかし彼女は両方の剣でその攻撃を受け流し、突然しゃがみこんだ。

相手があっけにとられる一瞬の隙を彼女は見逃さなかった。彼女は飛び上がると一回転して男の後ろに着地してその後頭部にすかさず一方の剣を埋め、一方の剣で相手の肺に穴を開けた。

あまりに一瞬の出来事だった。観客席を一瞬静寂が包み込んだ。ネンシーは構わず死体を後にした。観客がやっと呪縛から解放され歓声を上げたころには、ネンシーは控え室への垂れ幕をくぐり

抜けていた。

控え室に戻ると、そこには彼女の助手のハレーが立っていた。ハレーは彼女の師匠であり、年を取り剣を振るえなくなっても彼女を支え続けた人だ。彼には人の才能や能力を見抜く力があり、彼女の対戦相手を見てはアドバイスを与えていた。彼自身もかつてこの「世界最高決戦」を連覇していたスーパースターであり、この大会を知り尽くしていた。ネンシーも彼を完全に信頼していたので、彼を見るなり嬉しそうに微笑んだ。

「見てくれた？」

「鮮やかじゃった。さすがわしの弟子じゃ。」ハレーも微笑み返した。

「食事でもどう？」ちょうど昼時であつたし、今日の試合もこれで終わりだ。

「よかるう。」

二人は一つのレストランに入った。席につくなり、ウェイターが来た。

「何になさいましょうか？」

「私はステーキ二枚にサラダ三皿、そして・・・」

彼女の注文は一分間にも及んだ。

「・・・以上ですか？」ウェイターは膨大な注文に戸惑いながら聞いた。

「ええ、そうよ。」ネンシーは澄ました顔でそう答えた。

ウェイターは戸惑いながらハレーを見た。

「わしは、」彼は笑いをこらえながら言った。「コーヒーを一杯頼む。」

「かしこまりました。」ウェイターは足早に去っていった。

「相変わらずの大食家じゃな。」彼は笑いながら言った。「財布が空にならんよう気をつけなければならぬな。」

「私が払うわ。」ネンシーも笑っていた。「あなたの分もね。」
「わしも若いころはそうじゃった。」彼は遠くを見るような目つきで言った。「本当に財布が空になって店を追い出されたこともあった。」

ネンシーはそれを聞いて笑った。

しかし、ハレーの表情が突然険しくなった。ネンシーも笑顔を引つ込めた。

「大事な話がある。」ハレーは低い声で言った。「大会のことに
ついてじゃ。」

彼はネンシーをしつかりと見据え、こう言った。

「強敵が現れた。」彼は一息置き、言葉が続けた。「カルメンを知ってるじゃろう。」

ネンシーはうなずいた。カルメンは彼女がこの大会に参加しだす前まではこの大会を連覇していたスターであつた。しかしネンシーが初めて参加した大会の直前に謎の死を遂げた。カルメンは元々謎多き男であり、大会のときも時には剣術、時には魔術、一度は全身武装した男を素手で倒したこともあり、そのオールマイティーな戦いぶりは見るものを魅了した。彼は試合の時に仮面をつけることでも有名であり、彼の顔を実際に見た者も少なく葬式だって顔を仮面で隠しながら行われた位だ。

ネンシーも幼いころ彼の試合を見てあこがれたものだった。

「あいつにせがれがいることも知っているじゃろう。」ハレーは続けた。

「ええ。」ネンシーは唾を飲んだ。

「ミルキスという名じゃ。」彼の次の言葉はネンシーにも予測がついた。

「やつが大会に参加している。」彼は言葉を終えた。

第二話：呪文

「・・・。」ネンシーは言葉に詰まった。

いくらミルキスはカルメンとは別人であつてもその息子であることに変わりはない。恐らく幼いころからカルメン直々の手ほどきを受けたのだろう、とネンシーは見当をつけた。

「父親と同じく仮面をつけておる。」ハレーはネンシーの気持ちを察して続けた。

「父親ほどの鮮やかさこそないが、強敵に変わりは無い。十分に気をつける必要がある。」

「今までの、」ネンシーは運ばれてきた料理を頼張りながら言った。「奴の戦果を教えてください。」

「もちろんじゃ。」ハレーはポケットからメモを取り出し読み上げた。その紙には字がたくさん書いており、まるで蟻が集っているかのようなだった。

「一回戦は・・・レイモンドじゃな。知っているじゃろ、あの魔法使いじゃ。そいつを・・・たったの三十秒で倒した。使ったのは火炎魔法。一瞬で火だるまになったそうじゃ。」ハレーはネンシーをちらりと見、また視線をメモに戻した。

「二回戦はあの有名な剣士のヴァイタスじゃ。そいつに剣術で戦いを挑んだそうじゃ。互角じゃったんだが、途中でミルキスが突然魔法を使い出してヴァイタスを追い詰めたんじゃ。ギブアップするように説得、というか魔法で強制的にそうさせたんじゃ。」ハレーはネンシーに肩をすくめて見せた。「優秀な剣士だからの、情けでもかけたんだか。」

しかしこの大会では情けをかけるといふのは普通考えられないことであつた。今勝てても次の大会で相手になったときに勝てるか分からないからだ。競争相手は即刻潰すべきなのである。

ところがミルキスはその理論に相反することをやってのけた。余

裕があるところを見せ付けているのか、それとも何か思惑があるのか？

ネンシーはそこまで考えた所で苦笑いした。かつて世界を圧倒した戦士。そしてその息子。彼らの考えは頂点の極みに達してこそ得られるものであり、自分ごときが理解できるものではない。

ハレーも同じ考えだった。ミルキスとネンシーが戦うことになれば剣術においてはネンシーが勝るだろう。しかしヴァイタスの例で考えると、途中から魔法を使い出すかもしれない。そんなことをされてはさすがのネンシーもひとたまりも無い。ただの魔法使いとは違い、ほかの戦い方にも熟知しているミルキスは一通りの戦い方では到底太刀打ちできない。そういう奴の考えていることなど神のみぞ知ることだった。

「いいか。」ハレーはようやく運ばれてきたコーヒーの香りを楽しみながら言った。

「奴と戦う時は今まで以上に慎重にならなければならない。奴の試合を見た所で分かったのは奴がどうやら魔法を使うのが好きらしいという事じゃ。確かに剣術にも通じておるがの、お前と比べたらまだまだ足元にも及ばないはずじゃ。よって魔法を使われるのは確実じゃ。」ハレーはコーヒーに砂糖を混ぜながら分析した。

「さつき対戦表を調べたところ、お前と奴は決勝でぶつかることが分かった。まあ、お互い順調に行けば、じゃな。」コーヒーをすすり、続けた。「決勝戦は三日後じゃ。それまでに簡単な魔法を教える。わしも少々研究したことがあつてな、簡単なものじゃ。短い防御呪文を二、三個教えておこう。」彼はネンシーにいたずらっぽくウインクして見せた。ネンシーは微笑んだ。やっぱりハレーは頼もしい。彼のためにも頑張らなくっちゃ。

その日の午後、ハレーは早速ネンシーに魔法のレッスンを始めた。

「・・・いやいや、ヴィップ・ゾール・ヘリングじゃ。」

「クイック・ゴール・ヘディング？」

「違うわい！ヴィップ・ゾール・ヘリングじゃ！！」

所謂「簡単」な魔法を教えるには一日では到底時間が足りなかった。ネンシーがようやくその呪文をまともに唱えられるようになったころには空には月が昇っており、まぶたも重くなってきた。

「まあ、良い。明日も試合があるんじゃないから早く寝るんじゃない。」

「分かったわ。明日この呪文使って良い？」

「良いぞ。そういえばまだこの呪文の効果を説明してなかったな。この呪文はお前の目の前に透明な守りを作り出してお前をある程度の強さの魔法攻撃から守ってくれるんじゃない。ミルクス並の奴に通用するかどうかは知らんがの。」ハレーはネンシーを見据えた。「じやが明日のお前の相手は丁度魔法使いだったはずじゃ。」

「それは良いわね。」いままで魔法使いが相手になる度にその魔法攻撃に煩わされてきたネンシーにとつて魔法攻撃を、完全にではないが、ある程度無視して戦えるというのは朗報だった。

「おやすみなさい。今日はありがとう。」ネンシーは自分の部屋に向かった。

「おやすみ。」ハレーはネンシーの背中に言った。「明日の健闘を祈る。」

会場への垂れ幕をくぐると、そこには長いロープを着た男がいた。彼は自信ありげな目線でネンシーを睨んでいた。

ネンシーは心の中でその呪文を復唱した。

” ヴィップ・ゾール・ヘリング ”

よし、この勝負はもらった。

試合開始の合図が流れた。ネンシーはすかさず呪文を唱えた。そして剣を抜き払い、相手に突進した。

相手は魔法の杖を取り出し早口でなにやら呟くと、ネンシーに杖を向けた。杖の先から青白い光が発射され、ネンシーに向かって飛んできた。

が、彼女は構わず走り続けた。青白い光は彼女の前の透明な壁に

激突し、砕け散った。

相手はそれを見て慌てて次の呪文を唱えようとした。しかしネンシーの二本の剣は正確に男の胸を真一文字に切り裂いた。相手は激痛に顔を歪めた。

しかしネンシーは容赦なく相手をさらに切り裂いた。彼女はただ剣先に意識を集中していた。しまいには彼女はリズムに乗り出し、その剣と体が一体化したように見えた。

そして彼女は勝った。その長いローブに包まれた肉の塊を後にし、歓声とともに垂れ幕をくぐった。

またもやハレーが、そこにいた。

第三話：ミルキス、参上！！

「あの呪文を使ったんじゃない。」ハレーは顔色が少し悪いようだった。

「ええ・・・」ネンシーは戸惑った。今まで数え知れぬ戦いを経験したネンシーであるが、幼くして両親の代わりに面倒を見てくれたハレーからの賞賛の言葉を聞くたびに嬉しい気持ちになるのだった。しかし、今回は何故かハレーはとても憂鬱そうで、その目線はまるでネンシーを非難しているかのようだった。

「実はな・・・」ハレーは目を背けた。「わしは観客席でお前の事を見ていた。いい試合じゃったぞ。しかし、」肩をすくめて見せると、「奴がいたんじゃないよ。」

「奴って？」ネンシーは不思議そうに聞いた。「誰よ？」

「ミ、」ハレーは口ごもった。「ミルキスじゃ。奴が観客席にいた。」

「なんで・・・」ネンシーはさらに不思議がった。選手には特別の、観客席などよりも遥かにはつきりと試合を見ることが出来る専用席が与えられていたはずだ。

ミルキスは一体何なんだろう？確かに強さを極めた人は凡人とは価値観が違うかもしれない。ネンシーだってそういう人である。しかしミルキスは「違う」というレベルではない。「越えた」というべきであろうか。ミルキスはネンシーが思うに、彼は神であった。人間共が地上で醜く争っているときに彼は雲の上でそれを見下ろしている。あらあら、また喧嘩ね。可愛いんだこと。

「わしも最初のうちは意味が分からなかったんじゃない。」ハレーは続けた。「しかし、奴はずっとお前の事を見ていたんじゃない。じーっとな。」

「でも観客はなぜ彼に気づかなかったの？」ネンシーは訊いた。「彼は有名でしょう。皆に注目されるはずよ？」

「奴は、仮面で顔を隠しているじやろう。」ハレーは答えた。「奴は仮面の種類を色々変えることができるとしたら？普通の人に化ける事だって出来るじやろう。」

「それはありえるわね。でも、」ネンシーはますます意味が分からなくなっていた。「仮にそうだとしても、あなただって気づかないはずよ。」

「戦士の勘じゃ。ああいう身のこなし方は奴しかありえん。それにその目の色は、」ハレーはネンシーに視線を戻した。「ミルキスと同じ、青色じゃ。海のように深い青じゃ。」

「でも、同じ目の色の人なら・・・」ネンシーはそこまで言って、考えなおした。ハレーは頼もしい。今までの成功も彼のお陰だし、なによりも戦士として自分よりも長く戦っている。彼の言うことは信じたほうがいい。

「分かったわ。でも彼はなんのために・・・」

「わしだって考えた。そして結論を得た。」ハレーは推理した。

「奴はお前の戦い方を観察していたんじゃない。」

「なぜ・・・？」

「奴は確かにお前の言うとおり有名じゃ。しかしお前だって奴に負けず劣らず有名じゃ。自分の競争相手の戦いかたを見ておきたいと思ったのかも知れん。そして奴は、」ハレーは声を低くした「お前が防御呪文を使っていたのを見てしまった。奴にとっては大きな収穫じゃ。なんせお前は剣士じゃからな。普通剣士は剣術でしか戦わない。しかしお前は魔法を使ってしまった。すると」

「分かったわ。」ネンシーは冷静に答えた。「一人にさせてちょうだい。」

「・・・」ハレーは歩み去るネンシーをただじつと見つめていた。この娘は確かに気が強い。しかしやはり誰かを頼る必要があるみたいだ。

思えば25年前、一組の夫婦が自分の元に何か籠みたいなものを玄関先に置くのを2階の寝室からぼんやりと見つめていたのを覚え

ている。その時自分は高熱に見舞われていてあれこれ考えている余裕がなかった。その夫婦が馬車に乗ってどこかに行ってしまった後にはっとしてベッドを飛び起き 寝巻きのまま 玄関にたどり着いた。そしてまだ赤ん坊であつたネンシーを見つけたのだつた。

彼女はもう25歳になり、美しく強い女性になつた。良く自分がここまで育ててやれたものだ和我ながら感心していた。そして彼女の戦い、特に剣術において秀でている才能を発掘し、世界の頂点へと導いてやれたのも心底驚いている。

しかし、すこし後悔もしていた。確かにこの大会に参加することによつて彼女の實力を世界中に知らしめることが出来るし、なによりも優勝することによつて得られる莫大な賞金で何不自由ない生活を送ることが出来た。だが、一步間違えればそこには死という名の怪物が口を開けて待っている。この大会での敗北は死を意味するのだ ミルキスがとっている変則的な行動を除けば。こういう崖っぷちの世界に彼女を連れ込んだのははたして正しかったのだろうかと良く自問する。しかし答えは 分からない。

次の日、ネンシーに試合はなかった。彼女は既に決勝に駒を進めていた。しかし彼女は早起きし、スタジアムへと出かけた。

今日はミルキスの試合がある。

彼女は他人の試合などに全く興味がなかった。しかしミルキスに限つては 彼女はどうしても彼の戦いぶりを見ておきたかつた。

専用の席に座ると一般の観客席のほうを見てみた。もう既にたくさんの人が来ていた。一般の席は自由席なので、大会期間中は毎日席の争奪戦を楽しむことができるのだ。もちろん、あなたもネンシーみたいな専用席に座って見ることが出来ますよ、座れるもんならすまない、馬鹿にするつもりはなかった、許せ。

「老練な剣士、デルフィンでございますー!!」

デルフィンは全身を鎧で固めており、片方の手には剣を、片方の

手には鷹の紋章が彫り付けてある盾を持っていた。彼はここ、メッシルム王国の精鋭部隊に所属しており、その剣の腕前は一流であった。彼は50歳であったが、その動きはまるで20代の若者のようであった。彼は微動だにせずに静かに闘技場の真ん中で待っていた。

「そして」観衆は一瞬にして静まり、その視線はデルフィンの反対側にある垂れ幕に注がれた。

「伝説の戦士カルメンの息子、我らがミルクスです!!」

垂れ幕から一人の男が歩み出た。その顔面は銀色の仮面で覆われており、マントをたなびかせ軽快な足取りでデルフィンに向かっていった。

ネンシーはどきりとした。

この動きは、カルメンそのものではないか。幼い頃憧れていた英雄が、今、ここにいる!

ミルクス、参上!!

第四話：慈悲深き戦士

両者はスタジアムの中央でお互い睨みすえながら立っていた。

観客は皆緊張感を感じ取っているのか、こそこそと話す声さえ漏れてこなかった。皆の視線はスタジアム中央の二人に釘付けになっていた。

ネンシーもただ黙って見ていた。

正直この試合はどちらが勝つか、いや、ミルキスが勝つ方にネンシーは賭ける訳だが、デルフィンにも勝つ可能性がある事は彼女に否定できなかった。なんせ彼は有名な剣士なのだから。メッシルム王国の精鋭部隊にはたったの200人の戦士しかいない。にもかかわらず、隣国との戦いで5000人を相手にたったの10人程度の死者しか出なかった（もちろん相手は全滅だった）。世界最強の部隊に属していながら、その中でもかなりの腕前と評判だったデルフィンはミルキスをかなり苦しめるだろう。

しかし、ミルキスは剣士がもつとも苦手とする弱点である魔法を習得している。彼はいろいろと彼の父であるカルメンに似ていたのだが、戦い方は異なっていた。カルメンは剣術を得意としていたが、ミルキスは明らかに魔法の方が得意だ。ネンシーは確認した訳ではないが、ハレーはそう断言していた。と言う事は、デルフィンにとってかなり手強い相手であることはまず間違いないだろう。

試合の合図が流れた。

デルフィンは盾をかざし、剣を脇に構えた。そして、相手の動きを見定めながら一歩ずつ間合いを詰めていった。

ミルキスは剣を抜き払い、デルフィン向かって一気に走っていった。彼もネンシー同様、二本の剣を両手に一本ずつ握っていた。ネンシーはそれを見て、一瞬気になったのだが、すぐに試合を見ることに専念した。

ミルキスは両方の剣を左右対称に振り回しながらデルフィンに近づいていった。そして一方の剣をデルフィンの胸目掛けて突き出した。

しかしデルフィンは熟練した手つきでその剣を受け流し、その勢いで相手の喉を切り裂こうと剣を横一文字に振った。だがミルキスは恐るべき反射神経でその一撃を楽々と避けた。

デルフィンは空振りした剣先をくるりと翻すと、今度はミルキスの胸目掛けて恐ろしく速い突きを繰り出した。

ミルキスは慌てて横へと飛び退った。しかし剣先は避け切れたものの、デルフィンがとっさの判断で前に突き出した金属製の盾を避けることは出来なかった。彼は重い盾に思い切り頭をぶつけると後ろに飛ばされた。

ミルキスの頭からは血が滴っていた。しかし彼にはまだ意識があり、とどめを指そうとデルフィンが頭部目掛けて振り下ろした一撃を両方の剣を交差させ受け止めた。

デルフィンが剣を離し、また振り下ろそうとしたときに、ミルキスはデルフィンの膝を思い切り切った。相手がよろめく隙に立ち上がり、後ろへ退いた。そして剣を鞘に収めると、マントの裏側から一本の棒を取り出した。

魔法の杖だった。

デルフィンは一瞬あつけにとられて立ち尽くしたが、次の瞬間雄たけびをあげ、ミルキス目掛けて突進した。

しかし、ミルキスは短く呪文を唱えると、彼の隣にもう一人ミルキスが現れた。二人は全く同じく見えたので、デルフィンは思わず立ち止まった。一体どっちを攻撃すればいいんだ。

だがデルフィンはその答えを次の瞬間知ることとなった。後ろから声がしたからだ。

「正解は、その声は言った。後ろだ。」

デルフィンは振り返るとミルキスが立っていた。彼は杖をデルフィンに向けていた。そして呪文を唱えた。

杖先から紫色の炎が噴き出した。炎はまっすぐデルフィンに向かっていた。

デルフィンは盾を掲げ、身を守ろうとした。

紫の炎は金属製の盾を舐め、盾はあっという間に真っ赤に染まった。激しい熱がデルフィンの腕に伝わり、彼は慌てて盾を捨てた。熱い盾は彼の腕から皮膚を引き剥がし、地面に落ちると、紫の炎に包まれながら液体と化した。

しかしミルキスは容赦しなかった。彼はまた呪文を唱えると、青白い光がデルフィンの剣を弾き飛ばした。

そして、杖先をデルフィンに向けた。

ネンシーはミルキスの超人的な魔力に目を張った。これだけの強力な魔術を軽々と操れるものは滅多にいない。後は、とどめだ。

ミルキスが呪文を唱えると、杖先から白く淡い空気が出てきた。それは人に癒しを与えるかのごとく、とてもやさしくデルフィンを包んでいった。

観客含め、ネンシーとデルフィンも何かがおかしいと思った。

そして、その白い煙が消え去ると、会場の誰もが、目を張った。

デルフィンは生きていた！

デルフィンも驚きの目でミルキスを見た。そしてさっき紫の炎で火傷した腕の痛み、いや、ミルキスに蹴られた膝の痛みまでもが、さっぱりなくなっているのに気づいた。

恐る恐る自分の腕を見てみると、さらに驚いた。さっきまで火傷で真っ赤に染まっていた腕がまるで何も無かったかのように元通りになっていた。

「医療魔法だ。」「ミルキスは口を開いた。顔一面を覆っている仮面はどういう金属が使われているかは不明だが、彼が話すとしなやかに口にあわせて動いた。」「君にギブアップの権利を与えよう。」「デルフィンはきょんとしていた。そんな馬鹿な。自分は夢でも見ているのか。」

自分を殺せば、それはミルキスにとっての大きな手柄となるだろう。しかし彼は、その榮譽を噛み締めるチャンスを自ら放棄し、その代償として自分を生き残らせようとしている。

しかし、デルフィンはやはり生きたかった。家族もいる訳だし彼にはこんな戦士なんぞ辞めて余生を楽しく生きるという夢があった。だが彼はその夢は実現不可能だと思っていた。今日に至るまでは。

彼は改めて10メートルほど前方にいる若者 ミルキスを見直した。真に強い戦士がそこにいた。

「ギブアップだ。」このスタジウムは音響効果が抜群に良かったので、彼のこの呟きは皆の耳にはつきりと届いた。

「ギブアップだ！」彼は今度は大声で叫んだ。そこで審判団は慌てて勝利を意味するオレンジ色の旗をミルキスの側に揚げた。

ミルキスは踵を返すと、入場してきた垂れ幕に向かってすたすたと歩いていった。

デルフィンも帰っていった。今は冷えて固まった盾のなれ果てと二つに折れてしまった剣に目をくれることは無かった。

試合が終わってもネンシーが席を離れることは無かった。

彼女の心にはミルキスの残像がいつまでも残っていた。

もし、自分が

もし自分がミルキスの立場だったら、デルフィンを切り捨てただろう。

明日、彼女はミルキスと対戦することになっている。しかし彼女は全く恐れていなかった。

ミルキスは、神だ。

そして、神は

神は、慈悲深い。

第五話：闇夜の異変

男はフードを目深に下ろしており、顔の上半分は闇に包まれていた。

彼は馬に乗っていた。周りにも部下が5、6人馬にまたがっていた。

彼らは探し求めていた。彼らの馬の蹄鉄には魔法が掛かっているので、全く音が出ず、速さも矢のようだった。

しかし、彼らには「奴」に追いつける自信が無かった。

別に「奴」の方が速い馬にまたがっている訳ではない。「奴」はただ走っているだけだった。

しかし

「奴」の方が速かった。「奴」の方が格段に速かった。

フードの男は当初、「奴」の存在を仲間から聞いた時はとても信じる事が出来なかった。いや、どう考えても不可能だ。魔法の蹄鉄をつけた馬にスピードで勝つ存在などあるはずがない。

しかし「奴」は二本の足でいとも簡単に自分達を引き離した。

一体「奴」は何者だ。どこの国のいや、はたしてこの世のものかどうかさえ分からなかった。あの世からやってきた存在か？ マントの男はぼんやりと考えていた。

彼は闇の組織「地獄の牙」の一員だった。「地獄の牙」はメッシルム王国にはびこる一大組織で王国の悩みの種であった。最近は武力衝突も時たま起こるようになっていた。まあ、なるべく精鋭部隊は避けるようにしているわけだが・・・

突然、部下の一人が悲鳴をあげ、馬から引きずり降ろされた。そして、なにが起こったのかは分からないが短いうめき声とともに絶命した。

「くそっ！不意を付かれた！」俺としたことが、注意を怠ってしまった。ボスから何と言われるか・・・「早く！戦うんだ！」彼は

部下達に呼びかけると、さつき死んだ部下に向かった。

そこには人の形をした影があった。

彼は武器の槍を振り回しながら影に接近していった。そして槍が届くところまで来ると、思い切り槍を突き出した。

しかし、全く手ごたえが無かった。彼は目を凝らしてみるとそこに影は無かった。

「見間違いか・・・？いや、そのはずは・・・」彼は自分の視力には絶対的な自信あった。すると消えてしまったのか？

背後からいきなり激しい衝撃が伝わった。彼は馬から落ち、顔から地面に突っ込んだ。顔を上げてみると、影は目の前にたたずんでいた。

「槍は・・・どこだ・・・」しかし槍はどこにも無かった。

次の瞬間、影は握っていた槍で男の頭を串刺しにした。フードの男は頭を殴りつけられた様な感覚を最後に部下達が待っている世界に旅たった。

影はあたりを見渡した。いや、見えているのかさえ分からないわけだが、とにかくそういう仕草をした。

いま「奴」は街にいた。目の前には巨大なスタジアムがあった。

「奴」は、別に何か目的があった訳ではないが、とにかく夜の闇にまぎれてスタジアムに向かって歩いていった。

ネンシーは次の朝早く起き、剣の練習をしていた。

今日は、ミルキスと・・・

そう思うと、激しく緊張した。おかげで突然入ってきたハレーを間違えて切りつけるところだった。ハレーは少し立ち尽くしたが、ネンシーの心境を理解し、話しかけてみることにした。

「どうじゃ？」ハレーはぼつりと聞いた。

「ええ・・・」ネンシーは額の汗に手を触れた。剣を振ったからではない。これは、冷や汗だ。

「びつくりしたのよ、あなたが突然入って来るから・・・」平静

さを装おうとしたが、その声は上ずっていた。

「いいんじゃない。」ハレーも実は緊張していた。この試合でもしかしたら自分の不安が的中するかもしれない。しかし、引き返すことは出来ない。しかし、ハレーはネンシーよりもずっと自分の感情を外に出さない術に長けていたので、その表情を見てもその下の緊張には気づくまい。自分も緊張していることをネンシーに知られたら彼女は試合で本来の力を発揮することは出来ないだろう。

「朝食の用意をした。久しぶりにわしが作ってみた。これがどうもうまいかんものだのう。」ハレーは笑って見せた。

ネンシーはそんないつも通り茶目っ気なハレーに微笑んだ。

二人はさつさと朝食を済ませると、ネンシーは武器を持ち、スタジアムに向かっていった。家からスタジアムは歩いてたつたの20分だったので、ネンシーは選手の中で唯一大会期間中も普段通りの生活を送ることが出来た。

しかし、二人は何かおかしい事に気が付いた。なんだか騒がしい。大会期間中とはいえ、こんな早くからこんなに大勢の観客が集まった事はない。まさか、世紀の対決を目近で見ようと早くから椅子取り合戦に励んでいるのだろうか？

彼らはスタジアムに近づくにつれ、人ごみは増した。ネンシーはなるべく自分のことが気づかれないように人ごみを避けた。前にも熱狂的なファンに囲まれ身動きが取れなくなったことがあった。

だが、どうやらその必要はない様だった。

二人は人ごみの中央にあるものを見て、啞然とした。

一人のフードをかぶった男が頭を槍で貫かれ絶命していた。そしてその周りには5人程の死体と馬の死骸が無残に散らばっていた。

「どういうこと・・・？」ネンシーは絶句した。実は彼女はスタジアムの外で死体を見るのは初めてだった。だからある意味ショックだった。彼女は顔を隠すことも忘れていた。

「あれは！」群衆の中の一人が叫んだ。「ネンシーだぞ！本物だ

！

しまった、とネンシーは舌を鳴らした。こんな凄惨な殺人現場でもファンにとつてはどこ吹く風、自分が神よりも拝めている人物が現れればそこに集まってゆく。憐れな奴らだとネンシーは今まで何度も思った。馬鹿みたい。

しかし今はそんなことよりも早くスタジアムに逃げ込まなければならなかった。あそこにいけば衛兵が守ってくれるだろう。奴らとは関わりたくない。私のファンかどうかは知らないけど、とにかく消えてちょうだい。

だが全力疾走をしたネンシーは衝撃的な光景を目にしまった。いつもは入り口に4、5人いるだけのはずでしょ、でもなんで今日は

スタジアムの周りは数百名にも上る衛兵達でぐるりと囲まれており、まったく隙間は無かった。

しかもさらにネンシーを驚かせた事があった。

彼らはただの衛兵などではない。

彼らはメッシルム王国軍だった。彼らの身を包む鎧は朝の日差しを跳ね返し鈍く光っていた。

そして、皆完全武装していた。

第六話：スタジアムの異変

「なによ？」ネンシーは訳が分からなくなっていた。死体は転がっているし、メッシルム王国軍がスタジアムを包囲している。一体何が起きたというのか。

「そこにいるぞ！」追いかけてきたフアンの大群の一人がわめいた。

もうかなり近くまで追ってきたので、ひとまずスタジアムに入ってみることにした。ネンシーは衛兵達に向かって走っていった。

「何者だ？」ネンシーが衛兵に近づいてくるとその中の一人が言った。

「あら？知らないの？このスタジアムの女王様よ。ねえ、通してちょうだい！」ネンシーは無理やり衛兵を押しわけようとした。群衆はもう百メートル近くまで迫っていた。足の速いものなら十秒弱でやってくるだろう。一刻を争う事態だったが、衛兵達は荒々しくネンシーを押し返した。ネンシーは危うく転びそうになった。

「何よ！」ネンシーは憤っていた。「私はここでやる大会に参加する選手なの！大体あんた達何者よ！」

「だめだ。」強情な衛兵はきっぱりといった。「貴様が誰かは知らんが、我々はこのスタジアム内に誰も通してはならないとはつきりと命令されているんだ。」

「今日は決勝戦なのよ！なんでよりによって今日・・・」そこでネンシーはふと、後ろを振り向いた。

しまった！

フアンの一人がネンシーに抱きついた。そして次々とフアンたちがネンシーに集っていく。

「ネンシー様ー！」フアン達は口々にこう叫びながらネンシーにいや、「神様」に触れようと争いを繰り広げていた。

「やめてよー！」ネンシーは絶叫した。剣に手が届かない、いや、

それどころかさつき抱きつかれたファンのせいで手が全く動かなくなっていた。

「ハレー！助けてよ！」ハレーはどこか。さつきファンから逃げた時に置き去りにしてしまった。

しかも腹立たしいことに衛兵達は全くこの騒ぎを気にも留めようとせずにくそ真面目に任務を果たしていた。ネンシーは自分が女で良かったと思った。こんな糞みたいな軍隊に徴兵されないですむからである。

ネンシーは四方八方から圧迫されているせいで徐々に意識が遠くなっていた。前にもそういう事態に一回なったことがあるが、幸いハレーがいたお陰で助かった。でも今回は

群衆の力とはいかに恐ろしいものかを実感した。自分の強さゆえに神から与えられた宿命なのだろうか。徐々に呼吸がゆっくりになつていった。ネンシーは今や体重を群衆にあずけているだけで、もうもはや自分の足で立つてはいなかった。

次の瞬間、真っ白な眩い光の球が現れた。刺すような光を放つ謎の球体は高速でネンシーに近づいて来た。群衆達はネンシーに夢中でほかの事は気にも留めなかったので、それに気が付くよしも無かった。

光の球はネンシーに近づき、彼女を包み込むと、そのまま上に向かって上昇した。それを見た群衆の何人かは必死に手を伸ばしたが、球体は信じられない位強力な力でそれらを振り払った。そして誰も届かない位の高度に達するとある方向に向かって飛んでいった。

ネンシーはそこで意識を取り戻し、あたりを見渡すと、信じられないかのように頭を振った。ネンシーはこんな高い所を飛ぶのは初めてだったが、意外と面白いのに気が付いた。たぶん、魔法なのだろう。

しかしある疑問が頭をよぎった。一体誰が、何のために？ハレーは多少の魔法なら使えるがこんなのは絶対に無理だ。強力な魔術師で無いとこういう呪文を扱うことは出来ないのだ。

かなり飛んだ気がする。

もう夜だった。真つ暗なのでどこを飛んでいるか全く分からなかった。しかし幸い球体の中の気温は一定に保たれており、夜になっても寒くなる事は無かった。

しかもすわり心地もかなり良い。なんともいえない感触であつた。それよりもネンシーは腹が減っていた。昼を食べられなかったことはネンシーにとってはかなり応えた。あと少しの辛抱だ、と自分に言い聞かせた。

その望みがかなつた。球体が下降を始めたのだ。高度を下げると、下には一軒の岩屋があつた。かなり古びており、中には人の気配が無い。不気味なところだ、とネンシーは思った。

球体は地面に着くとすぐに消えた。おかげでネンシーはよろめいてしまった。

「ここはどこ？」ネンシーはあたりを見渡した。

「何かお困りかな？」後ろから声がした。ネンシーは振り返るとマントを羽織つた男がいた。闇夜に紛れていて顔が全く見えない。

「ええ・・・ここはどこなの？」ネンシーは単刀直入に聞いた。

「ここは私の自宅だ。」「男は神妙に答えた。」「ちなみにここはメッシルム王国ではない。」「一息おいて男は続けた。」「カイロン王国だ。」「

「えっ!？」ネンシーは絶句した。あの球体は実は信じられない位速く移動していたのだと気付いた。カイロン王国はメッシルム王国の隣にある小さな国であり、メッシルム王国の傘下に入ること何とかが持つているような国である。ネンシーは外国に行ったことがなく、いつか外の世界に行くのも悪くないと思っていた。しかしそれがこんなにも早く、こんな形で実現するとは思わなかった。

「あ、あの・・・」動揺していたネンシーは言葉をうまく発することが出来なかった。

「何か?」マントの男は妙に落ち着いていた。

「何か、食べ物・・・」ネンシーは激しくお腹が空いていた。
「もちろんだ。最高級の料理でもてなそう。英雄ネンシーよ。」
「なんで私の名前を!？」ネンシーはどきりとした。この男は一体・・・?

「我が家へ案内しよう。」男は構わず岩屋に向かって行った。そして鍵を取り出すと、扉の鍵を一つ一つ開けていった。鍵は何故か五個も取り付けてあり、すべてを解除するのにかなりの時間がかかった。

「そうだ。」男はぎいぎいと音を立てながら開いた扉の奥から視線を外さず話し出した。

「ここら辺はがらくたが散らばっているからつまづかないように。」
「そう言いながら何か取り出した。」魔法で光を呼び出そう。」

魔法の杖の先から光が放たれ、暗闇を照らした。そしてネンシーの方に向き直りその杖を彼女に差し出した。

「さあ、これを使って足元を照らしながら歩くんた。私は勝手を知っているから必要ないがな。」

しかしネンシーはその言葉を聞いていなかった。光に照らされた男の顔を見てしまったからである。

いや、普通それを「顔」と呼ぶものは少ない。
その顔は銀色の仮面で覆われていたからである。

「ようこそ、我が家へ。」ミルキスは微笑みながら言った。

第七話：豪華な地下室

「なんで・・・？」ネンシーは激しく動揺していた。今の今まで自分を導いていたのは　ミルキスだったのか！

「早く家に入るうか。」ミルキスは魔法の杖をネンシーに手渡すと、一人で勝手に岩屋に入り込んだ。ネンシーは訳が分からぬままに後を追った。

確かに岩屋は雑然としていた。大量の埃を被った本や、錆びた武器、死んだねずみまでもがコレクションされていた。

「止まれ。」ミルキスは短くそういうと、もう一本の杖を取り出した。一体何本持っているのか　魔法使いは、特に強力な魔法を多用する場合、強力なエネルギーによって杖が粉々になるのは日常茶飯事だから、予備の杖を大量に持ち歩いているとネンシーは聞いたことがある。ミルキスもそういう魔法使いだ、試合の時だってそうだった　そういえば、試合はどうなったのだろう。

ミルキスは杖を地面に向け、呪文を唱えた。すると、何も無いように見えた地面に突然裂け目が現れた。裂け目は大きくなり、人間一人がやつと通れそうな真つ黒な穴が開いた。よく見てみると、脇には梯子が据え付けられていた。

「私が先に降りる。」そしてミルキスは梯子に足をかけると、ネンシーは急いで口を開いた。

「この下には何があるの？」ネンシーは言った。

「私の自宅だと言ったはずだ。」ミルキスは微笑みながら言った。「なんで地下にあるの？なんで魔法を使わないと扉が開かないの？なんで・・・」

「質問が多すぎる。」ミルキスは遮った。「君の質問に答えることを約束しよう。そして君に危害を加えないこともね。だが、まず降りてくれないと。」

「やだよ。」ネンシーの手は剣の周りを右往左往していた。「私

はハレーの所に行きたいの。こんな訳が分からない地下室になんか行きたくないわよ。」

「腹が減ってるんだろう。」ミルキスはなお、落ち着いて言った。「せめて何か食べてからにしないか。」

「ハレーのところに連れてって。」ネンシーの両手は既に剣の柄にかかっていた。「家に送ってちょうだい。」

「ハレーになら会わせてやれる。」ミルキスは言った。「しかし家には送れないな。」

「なんで？」

「ハレーは」「ミルキスは足の下の暗闇を指していった。「ここにいるからだ。」

二十分後、二人は梯子を降りきった。真つ暗闇で、何も見えないしかし、ミルキスは全く迷わずに大きな扉に近づくと、突然そこに四角い窓がぼつかりと開いた。ネンシーの目は闇にすっかり慣れてしまったので、中からもれる眩い光に思わず目を細めた。

窓の中には子供の顔があった。その子供はミルキスを見るなり、嬉しそうに笑ったが、その後ろにたたずむネンシーを見てその顔をしかめた。

「誰だい、あの女の人は？」子供はミルキスに聞いた。

「ああ、お客さんさ。さっき来たおじいちゃんの娘さんだ。」

「ふん。」子供はそう言いながら扉を開けた。十歳位なのだろうか、その男の子は扉の脇に立っていた。

ミルキスが入ったあと、ネンシーもそれに続いた。そして男の子の隣に來ると、その子供を見つめた。その子供はネンシーを見るなり、恥ずかしそうにもじもじした。

「早く入んなよ。」

ネンシーは微笑むと、頷いた。そして、ミルキスについていった。彼女の後ろで扉が勢い良く閉まった。

上のさびれた岩屋からは想像もつかない位豪華な内装であつた。

長い廊下はネンシーが両腕を伸ばしても余裕があるくらい広く、壁には等間隔に松明が燃えていて、松明と松明の間にも美しい絵や面白い詩などが凝ったフレームにはめられ、壁に掛けてあつた。そして、廊下の突き当たりにはまた大きな扉があり、今度こそ鍵や魔法を使わずに開けることが出来た。

扉を開けると、巨大なホールがそこにはあつた。そして、ネンシーはあつと驚いた。別に天井から吊り下げられた巨大なシャンデリアに感動したのではない。師匠がホールの真ん中の椅子に座つてくつろいでいたからではない。

大勢の子供がそこに居たのだ。何十人も、百人は居ないものの、かなりの数だつた。そして、ミルキスが入ってくるなり、皆彼に駆け寄つた。しかし、あつ氣にとられてたたずんでいるネンシーを見るなり、その歩調を緩めた。

ネンシーはしばらく何も言えなかつたが、最初に沈黙を破つたのはミルキスだつた。

「皆、ネンシーさんだよ。」ミルキスは子供達に言つた。

「ネンシーって、だあれ？」小さな女の子が言つた。

「有名な人さ。剣の達人だよ。」

「ミルキスにいさんとどっちが強いの？」さっきの女の子が訊いた。

「ネンシーさ。」ミルキスはぼそつと言つた。まるで自分に言っているかのようだつた。

「・・・よろしくね。」ネンシーは慌てていった。まるで自分が喋れることを証明したかのような話しっぷりだつた。

「ははは・・・」子供達の後ろから声がした。ネンシーが求めていた、救いの声だつた。

「君も、連れてこられたのかの？」ハレーはネンシーに言つた。

「そうよ。」ネンシーは顔をほころばせた。

「乗り心地は良かったぞ。ミルキスに感謝せねばならんな。」ハ

レーはミルキスに言った。妙に機嫌が良いのにネンシーは気付いた。ミルキスは微笑んだ。ネンシーはそれを見て、少し変な気分になった。今日、トラブルさえ起きなければ対戦相手となっていたはず

もちろん、ネンシーはこのあと、驚愕の事実を知るのだが

なのだ。そして、彼女の頭の中には、様々な疑問でごった返していた。なぜ、ここは地下深く厳重に守られているのか。なぜ、子供が大勢いるのか。なぜ、スタジアムをメッシルム王国兵が囲っていたのか。なぜ、まるでごちゃ混ぜサラダみに、疑問が疑問を呼び、それにいかにネンシーが頭を振り絞ろうと、答えが出せないものばかりであった。

だから、ネンシーはミルキスに質問を投げかけようとしたとき、一気に質問が口から出ようと押し合いへし合いを始めたため、結局意味の分からない唸り声のようになってしまった。

「なんひえわやしかこ・・・」

子供達がどつと噴き出した。中には笑い転げるものもいた。ネンシーは顔を赤らめた。

しかし、ミルキスはなぜか笑顔を逆に引つ込めた。彼はネンシーを見据えると、微笑んだ。

「話は、後で食事を取りながらにしようではないか。」彼は子供達を見渡し、「今日はパーティーだ！新しい仲間が増えた名目でない！」と高らかに宣言した。子供達は歓声をあげた。

「皆パーティー好きだね。」ミルキスはネンシーに言った。「どんな名目でもパーティーを開ける自信があるさ。この前は、・・・チーズが嫌いな子がそれを克服したことを祝うパーティー・・・なんてものも開いた。」

「そうなの・・・」ネンシーはハレーを見てみた。彼は嬉しそうに子供達とふざっけっこしていた。そういえばネンシーも幼き頃、剣の稽古の合い間に遊んでくれたものだ。ハレーは子供好きなのだ。そして、彼女は隣のミルキスをみてみた。身長は自分よりも僅かに高いだけなので、小柄であった。そして腰には剣が二本下がって

おり、ネンシーが使っているものより少々長い種類だった。柄の所に記されているシンボルを見て、この剣は魔法の産物であることがわかった。魔法の剣は鋼の剣に比べて切れ味では劣るものの、とても軽く、初心者でも扱いやすいという利点がある。ちなみにネンシーは鋼の重い剣の方が好みであった。

しかし、ミルキスの個性を決めるのはその体格でも魔法の剣でもなかった。鈍く銀色に輝く謎の金属で出来た仮面である。「謎の金属」というのも、その仮面がミルキスの顔の動きに合わせて変形しているからである。目の部分には穴が開いており、そこから一對の青い目がのぞいていた。

もちろん、これも魔法の産物なのだろう、とネンシーは思った。

「食卓に向かうか。」ミルキスはネンシーに言った。

「ええ・・・」ネンシーはハレーをみると、思わず失笑した。それも、彼が子供達と一緒に手をつなぎ、一緒にはしゃぎながら、一緒に食卓に向かっていったからである。

「元気な方だ。」ミルキスは静かに言った。「私の父親もこれ位元気でいれば・・・」彼はこういい残し、足早に食卓に向かった。

ネンシーもしばらく立っていたが、皆食卓に着いてからやつと足を動かした。

疑問を、晴らさねば。彼女は今、違う意味で空腹を覚えていた。

彼女は、知りたかった。

ミルキスは席に座りながら、立ち尽くすネンシーを見ていた。彼はわざと自分の隣だけに空席を残した。

彼女に、話さねば。彼は仮面の下に重大な真実を秘めていた。

彼は、話したかった。

突然、扉が勢い良く開いた。

第八話：歓迎パーティー

あなたは、教室の中で、友達と話していたときに扉が突然勢い良く開いたときの気分を覚えているだろうか。扉の外は自分達とは関係ない世界であり、自分達の世界からそれを隔てている「扉」と言う名の境界が開かない限り、その世界と関わりを持つことは無い。しかし、その扉が「勢い良く」開くと、異界の空気がどつとなだれ込み、その異様な雰囲気にも誰もが好奇心と恐怖が入り混じった心境になり、思わず視線を投げかけるだろう。

そして、勢い良く扉が開くと、子供達もおしゃべりをやめ、ネンシーやハレーもその扉の方に振り返った。

勢い良く開いた扉からは、その見上げる程大きな扉から出てきたとは思えないほど小柄で、しかもぽっちゃり太っていた、不健康に色白な男が出てきた。彼は扉を一旦開けると、すぐに戻り、大きな台を押して その台には車輪がついていた 入ってきた。見てみると、その台には多くの料理や、果物が乗っていた。

どうやら子供達には馴染み深い人物のようで、ミルクス同様、登場した際には子供達の歓迎を受けた。ぽっちゃり男はミルクスの前を通るときにわざわざ台から手を外し、ミルクスにお辞儀をした。そしてついでにネンシーとハレーの二人に軽く会釈した。

ネンシーも軽く会釈をした。彼女はその台車が気になってしょうがなかった。それもそのはず、大食家である上、昼から何も食べていないのだから。

「うちの料理師だ」ミルクスは言った。「トロという名前だ」
「そうなの」ネンシーは唾をミルクスに悟られぬよう、飲み込んだ。「おいしそうな料理ね」

「もちろんさ」ミルクスは水を一口飲んだ。「トロは一流の料理人だ。でなきゃ、私の下で働いていない」

ハレーは面白そうに笑った。「わしの腕も中々のものじゃぞ？わ

し程うまく目玉焼きを焦がすものはほかに見たことが無い」
ミルキスも笑った。「早速、あなたの料理を食べたくまりましたよ」

料理が皆の元に行き渡ったのをミルキスは確認すると、そそくさに立ち上がった。

「では皆、これだけの食料に恵まれていることを神に感謝しよう」
ネンシーとハレーは戸惑った。二人には食事の前に神に祈った事はないし、第一、メツシルムの習慣ではなかったからだ。

しかし、皆静かに両手を合わせ、目を閉じているのを見て、二人もそれを真似した。

「よし。では食事を始めよう！」

ミルキスはそう宣言すると、皿とスプーンのぶつかり合う音やおしゃべりなどで一気ににぎやかになった。トロもミルキスの向かい側に座って食べていた。

「ネンシー」ミルキスはいきなりネンシーに話しかけた。

「ぬあにいい？」口いっぱい料理を頬張り、ネンシーは慌ててミルキスに言った。

「君にとつても、私にとつても、まずい事態になってしまった」
ミルキスは続けた。「今日の試合の件だ」

「……何があったの？」

「殺人現場を目撃しただろう」ミルキスは一口、料理を食べた。

「その犯人が、スタジアム内に逃げ込んだ可能性があるんだ」

「だから軍隊が…」

「そうだ。しかし、その犯人を目撃したものは一人もいないんだ。だから特定のしようがない」

「でも、軍隊で囲ったんなら、逃げられないでしょ？だから、いつか捕まるんじゃないの？」

「いいか？」ミルキスは声を低くした。「犯”人”と言うが、私と思うに、そいつは人ではない」

「それってどういうこと？」ネンシーは声を低くして答えた。「人じゃないなら、なによ？」

「異界の魔物だ」

「魔物！？」ネンシーは驚いた。

「そう、魔物だ」ミルキスは、水を飲んだ。「馬の足跡、人の足跡のほかに、全く見たことのない、楕円形の足跡があつたんだ。それにその足跡と足跡の間の距離は妙に長かった。非常に速く、いや、この世のものと思えぬスピードで走ったことになる」

「でも……」

「それに、死んだ奴の背中に手形が深く残っていた。とても強いや、この世とも思えぬ強さでひっぱたいたことになる」

「でも、ちよつと足が速くて、力が強い人ならいくらでも……」

「“ちよつと”？魔法の蹄鉄をはめた馬よりも速い奴がか？しかも鎧越しに殴って手形をつける奴は相当な怪力だと思うが。」

「なんで」ネンシーはなんだか良く分からないでいた。「なんでそういう事になったのかしら」

「理由は分からない。いや、分かる必要は無いだろう。いま、我々が知る必要があるのは、その魔物が、今どこで、何をしているからだ。」

「でも、どうやって？」ネンシーは訊いた。「どうやって知るの？」

「そのために君とハレーをここまで連れてきたのさ」ミルキスは微笑みながら言った。「君たちと一緒に考えたいんだ」

「えっ……」

「今、メッシルムのほうは危ない。君の自宅に帰らせてもいいが、ここに居るほうが遥かに安全だし、なによりも子供が喜ぶ」

「そう、一つ訊いていい？」ネンシーは子供達を指差した。「なんでこんなに子供が……」

「浮浪児たちだ。私はそういうのを放っておけない性格でね。しかも、彼らを養うんだ、と思えば、試合でも頑張れるし」

「そうなの……」ネンシーは、ハレーの為以外に誰かのために戦ったことが無かった。ほとんど自分の名誉、あるいはうずく戦いの本能を沈めるためである。

しかし、デルフィンとミルクスの対戦を見る限り、ミルクスは全く自分のため、名誉のために戦っているとは思えない。子供達のためだったのか、とネンシーははっきりはしないものの、納得した。

「まあ、とにかく」ミルクスは短く言った「我々の決勝戦は当分の間、お預けだ」

と、ここで読者の皆様に謝らなければならないことがある。それは、この文章がまたまた前回同様の終わり方で終わらなければならない、と言うことだ。恐らく、読者の皆様は多忙の中、わざわざネンシーの物語を、今こうして読んでいるというのに、同じ終わり方では申し訳が立たないことは、彼らの物語を調査研究している筆者としては、良く承知している。

しかし、私はあえて同じパターンで行こうと思う。それも、ネンシーが恐るべき事実を知ることになることを知ってしまった以上、この終わり方で無いと気が済まないのだ。今調査のため空っぽのミルクス宅でこの文章を書いている訳だが、そろそろ外の空気を吸いたい気分なので、失敬。

突然、扉が勢い良く開いた。

第八話：歓迎パーティー（後書き）

ネンシー：あらあら、何でまた同じ終わりがたなの？

ハレー：まあ、本文を読めば分かるじやろう。つまり、「お前が何かを知った」のを知ったから、ということじゃ。

ミルキス：では、いつも通り、君たち読者の皆様の感想文や評価は私の自宅に届き、私が直接拝読するでしょう。

ネンシー：私にも見せてよ！

ハレー：うるさいわい！

ミルキス：まあまあ、二人とも落ち着いて…

第九話：地獄の協力関係

「ミルキス様」入ってきた人物は息を切らしていた。「奴が到着しました」

「”謁見の間”に案内してやれ」ミルキスはぱつと立ち上がり、ネンシーの方を見た。

「君にも来てもらう必要がある」そしてハレーの方を見た。「あなたは……」

「分かつておる」ハレーは遮った。「わしは子供と残る。何をするか知らんが、わしはもう年を取っておる。若い奴らと違ってな」

「済まないな」ミルキスはそう言つと、ネンシーに手振りで見せて来るよう示した。

長い廊下をミルキスとネンシー、そして入ってきた人物と一緒に歩んで行った。ここで”人物”とあるのは、その人物がフードを深くに被っており、男か女か区別がつかなかったからである。

「ねえ」ネンシーはいつまでも続く廊下にいらだちを覚えていた。しかも、明かりである松明も除々に少なくなっており、廊下の突き当たりは真つ暗になっていた。

「ねえ」ネンシーはミルキスに話しかけた。「どこに行くの？」

「”謁見の間”だ。重要人物との会議に使う部屋だ」

「重要人物つて？誰？」

「今に分かる」ミルキスは歩くスピードを速めた。ネンシーは黙ってついていく事にした。

廊下の突きあたりは真つ暗だったが、徐々に松明が減っていったおかげで目も闇に十分慣れていたのだ、そこにある扉を十分見ることが出来た。その扉はさっきまで見ていた見上げる程の大きさの扉とは違い、いたって普通のサイズであった。そしてその扉の上の壁に板が取り付けられており、”謁見の間”と暗闇でもはっきりと見

える位鮮明に書いてあった。ミルキスは魔法の杖を取り出すと扉に向かつて呪文を唱えた。

中に入っても、ほとんど暗闇であつた。小さなろうそくが部屋の真ん中で揺らめいている以外明かりは無かつた。

しかし、良く見てみると、椅子が二つ向かい合うように置いてあり、一方には全身黒いマントで包んだ人物が座っていた。ミルキス達が入ってきた事に気付きもしないかのようになり、微動だにしなかつた。不気味な静寂さが部屋を満たしていた。

「よう」不気味な低い声が響いた。黒マント男はミルキスに話しかけた。

「ひさしぶりだな」ミルキスは静かに言った。「前に会つた時は親父も健在だつた」

「ふふふ……」

不気味な人物の笑い声程表現が難しいものはない。例えば、黒マント男の今の笑い声は「ふふふ」では無く、「ぐぐぐ」と表現することも出来るし、「ふうふうふう」と言う事も出来る。多分一番無難なのは「
」と言う、三つの黒丸で表現することなのだろうが、それだと文章にならない。困つたものだ、と私は「謁見の間」の廢墟に横たわる骸骨を足で突きながら思っているわけだが、それは関係の無い話。

「なんで呼び出した？」黒マント男は不満そうにぼやいた。

「協力関係を築くためだ」ミルキスは答えた。

「奴」を恐れているのか「黒マント男はせせら笑つた。「お前らしくないな」

「奴」を恐れているのはお前達の方ではないのか？」ミルキスは表情一つ変えずに言った。「部下を沢山失っているのはお前らの方だ」

「だから何だ」黒マント男はうなつた。¥”うなる”と言うのも、獣じみていたからである。「だいたいお前は我々と協力関係を築く程の実力を持っているのか？我々を見くびるんじゃない」

「確かに私一人では無理だ」ミルキスはどこか自信ありげだった。
「しかし、こつちには腕の立つ剣士が勢ぞろいしている。例えば、」
ミルキスはネンシーの方を指差した。「彼女はメッシルム王国、いや、世界で最も腕の立つ剣士だ」

「そんな馬鹿な」黒マント男は信じていない様子だった。「なぜそんなに自信があるんだ？大体女の細腕で男に勝てる訳が無いだろう。馬鹿も休み休み言え」

「なら試してみたらどうだ？もしもお前の方が勝ったら私は退くぞ」

「面白い」黒マント男は後ろの闇に向かって合図した。すると、巨大なあの見上げる程の大きな扉はそういう奴の為にあるのかもしれない筋骨逞しい男が鎧で身を固め、巨大な剣を軽々と持つて進み出た。２メートルはあるだろう。つい最近ネンシーが戦った奴に似ていたが、こつちの方には強力で邪険なオーラがあった。

「どうだ」黒マント男は馬鹿にしたようにネンシーに言った。「降参するなら今のうちだ」

ネンシーは少々たじろいでいた。男が怖い訳ではない本物の戦士は筋肉馬鹿を恐れないものだのだ。訳が分からなかったのだ。もしかしたらミルキスが自分を連れて来たのもそう言う事を想定していたからかもしれない、とネンシーは考えた。

小部屋をさらに奥に行くと、小さな廊下が続いていた。「小さい」と言ってもネンシーにとってではなく、その相手の巨人にとってである。

廊下を抜けると突然開けた。巨大な、とは言いがたいが、中々大きな闘技場があった。小部屋とは違い、しっかり松明で明るく照らされていた。

「良いか」ミルキスは小声でネンシーに耳打ちした。「ためらうな。殺しても構わない相手だ」

「あの人は誰なの？なんで私が…」

「良いか」ミルキスは強引にさえぎった。「我々の運命はこの勝

負の勝敗に掛かっているんだ」

ネンシーはまた質問しようとしたが、相手の巨人の表情に浮かぶあざけりの表情を見て考えは一変した。どっちが強いを試してみようじゃないの。

「分かったわ」

「頼んだぞ」ミルキスはネンシーの背中を軽くたたくと、歩み去った。

ネンシーは闘技場の中央で男と睨みあった。

男は重い剣を振り上げた。そしてネンシーに向かって振り下ろした。あまりに単純な攻撃だった。ネンシーは脇へ飛びのくと、剣を抜き払い、構えた。すぐに攻撃する手もあるが、相手の鎧の厚さを考えると、先に大振りさせて疲れさせた方が良く、ネンシーは0.1秒で考えた。

相手はまた剣を持ち直し、横になぎ払った。中々速い一撃だったが、ネンシーの反射神経をそんなスピードで欺くのは不可能だった。彼女はさっと相手に近づき、脇腹を剣で小突くと、さっと飛びのいた。巨人は馬鹿にされた事に腹を立て、足を振り上げ、蹴りつけようとした。が、逆にふくらはぎに剣を突きたてられると、痛さに足を引っ込めた。

「お遊びはここまでだ」巨人は気持ち悪い声でそう宣言すると、剣をやたらに振り回した。それこそネンシーの思う壺であった。剣先を楽々避けると、手や足、たまには脇腹を小突き、そのたびに相手は怒りにまかせて剣を振り回すが、ネンシーにとって蠅が止まりそうな遅さだったので、かすり傷一つ負わなかった。

そしてついに相手がぜいぜいと肩で息をし始めると、ネンシーは行動にでた。彼女は相手の顔面目掛けて一方の剣を投げつけた。相手は慌てて顔をそらした。もう剣ではじく為の体力は残っていなかった。その隙にネンシーは相手の鎧の胸の辺りの継ぎ目の間に剣先を滑り込ませた。肉に剣先が埋まる感触が伝わるとともに、血

があふれ、相手は苦痛に叫び声を上げた。ネンシーは剣を抜き、相手の後ろに回りこむと、さっき投げた剣を拾い上げた。そして、背中の鎧に剣をつき立てた。もちろん、貫通しなかった。しかし、剣ががちりと鎧に埋まると、ネンシーはそれを踏み台にして、相手の後頭部に届くようジャンプした。

そして、ネンシーは勝利を収めた。頭を刺し貫かれた巨体が横たわり、血が一面に広がっていた。ネンシーは二本の剣を引っっこ抜くと、鞘に収め。もちろん、ちゃんと血を拭ってからだ。死体を後にした。

「どうだ」

「これは……」黒マント男は信じられないかの様に呟いた。

「いい加減自分の無力さを認めたらどうだ」ミルクスはうんざりしたように言った。「こっちはそういう戦士がざらにいるんだ。」

ここはただの孤児収容所では無いんだぞ」

「仕方が無い……」黒マント男は仕方なさそうに言った。

「そう言ってくれて嬉しいよ」ミルクスは微笑んだ。

こうして、“地獄の牙”の一員であるガブルはあっさり、ではないが、比較的あっさりとミルクスと協力することを快諾した。

”奴”を消すために。

第九話：地獄の協力関係（後書き）

いやはや、ネンシーもよくやってくれたものだが、ここに疑問が幾つか残った。¥”奴”とはいかなる存在なのか、なぜミルクスは躍起になってそれを消そうとするのか、そしてミルクスの父親であるカルメント”地獄の牙”のガブルの関係。それを解明するにはかなりの労力が必要だが、秘密を知りたい以上、そうするしかない。

そして、この物語に対する疑問や意見などは下の送信フォームから送信してくれたまえ。色々な形でそれに答えようと思う。

第十話：ミルキス、卒倒

ネンシーは無論そんな事を知るよしもなく、ただ勝利の感覚を噛み締めていた。ここで「感覚」とあり、「快感」などというありきたりは表現を使わなかったのには、多くの理由がある。まず、これがネンシーにとって初めてスタジアムの外で行った殺人であり、つい最近死体を見たときのように少なからずショックはあったし

もちろん、自分で殺したので、そこまで大きいものではなかったが、しかも大勢の観客と太陽の下ではなく、地下深く、たった二人の観客しかいなかったのも相当な問題だった。読者の皆さんもご存知のように、誰も観ていないサッカー大会、誰も訪れない遊園地ほど虚しいものは無いわけであって、今私が誰にも見つからないように生きているのも同じく相当な問題であり、時間の無駄だと思ってもしょうがない。

ところが、ネンシーがやってのけたのは観客から喝采を浴びることよりももっと重要なことであったのだ。つまり、時間の無駄ではなかったのだ。しかし、今の所本人はそれを理解していない。いや、後で知ることになるが。

「よくやった」ミルキスはネンシーに歩み寄った。「怪我は無い
か」

「ないわ。たやすい相手だったもの」ネンシーは後ろの死体をちらりと見た。「でも……」

「分かっている」ミルキスは闘技場を後にしながら行った。「初めてスタジアムでない所で人を殺したんだからな」

「それもそうだけど……」ネンシーはミルキスの仮面に視線を向けた。「あの黒ずくめは誰なの？」

「“協力者”だ」ミルキスは静かに言った。「組織と組織をつなぐ使者のことを、我々の世界では“協力者”と呼ぶ」

「組織？使者？」ネンシーは訊き返した。「我々の世界って…」

「“地獄の牙”を知っているか」ミルキスは遮った。「巨大な地下組織だ。メッシルムにその本部がある」

「たしか私が小さい頃、ハレーがそんな事を言ったかも知れないわ」ネンシーは思い出しながら言った。

「十歳位の頃だったと思うわ。剣の稽古の後に、ハレーが大事な話があるって、私を呼んだの。そしたら、神様を信じるかって、訊いてきたの。」

「…」ミルキスは黙って聞いていた。

「そして、信じるって答えたのよ、私。」ネンシーはミルキスが思ったよりも自分の話に聞き入っているのに驚きながら、続けた。

「そしたら、ハレーは笑いながら、こう言ったの。神様はいるかも知れないし、いないかも知れない。信じてもいいし、信じなくてもいい。でも」「ネンシーは少し間を置いた。

「でもなんだ？」ミルキスは何故か冷や汗をかいていた。洞窟内は涼しいはずなのだが…

「悪魔は確実にいる。そこら中の暗がりには、君の背後に、そして…」

「もう良い！」ミルキスは怒鳴った。ネンシーは口をつぐんだ。ミルキスが怒鳴るのを初めて見た彼女は、またショックを受けた。

「今すぐハレーの所に行こう」ミルキスはそう言いながら足早に去っていった。

「待つて！」ネンシーは急いで付いて行った。

ミルキス達がホールに戻った頃は、ハレーだけが椅子に座っており、他の皆はもう部屋に戻ってしまっていた。ハレーはぼんやりとしていたが、二人が戻ってきたのを確認すると、につこりと微笑んだ。

「ハレー」ミルキスは呼びかけた。「お前だったんだな！」

「何の話しじゃ？」ハレーは困惑した顔つきでミルキスに言った。

「剣と魔術の闘争」で禁断の魔術を使ったんだ」ミルキスはひとりでに喋りだした。「奴」の封印を解いたんだろ」

「奴」とは？」ハレーは肩をすくめた。「聞き覚えが無いな」

「いいや、違う」ミルキスはいつそう激しく汗をかいていた。「そこら中の暗がり、君の背後に、そして…」

そこまで言うと、ミルキスは卒倒した。全身が青白くなっていた顔には仮面がついていたので、顔色は伺えなかったが。

「ミルキス！」ネンシーは倒れたミルキスの元に駆け寄った。ミルキスの呼吸は弱く、速かった。

「…」ハレーは何も言わずにミルキスのそばに行くと、手首を拾い上げ、脈を計った。

「どう？」ネンシーは訊いた。

「わしは医者ではないんだがの」ハレーは手首を戻した。「じゃが、何と無くたいした事は無いと分かった。とにかく、別なところに運ぼう」

ネンシーはミルキスを担ぎ上げると この動作は普通女性がするものではないのだが ハレーに付いて行った。ハレーは何故かこの勝手を知っていた もちろん、それは実は重大な秘密でもあるが。

ハレーはネンシーをある部屋まで導くと、そこに置いてあるベッドにミルキスを乗せた。

「わしは水を持ってくる」ハレーはベッドのそばにある椅子を指差した。「その椅子にでも座って看病しておくんじや」

「分かったわ…」ネンシーはミルキスを見ながら言った。「何だろう…」

「あまり考えないようにするんじや」ハレーは即座に言った。「世の中には勘違いする奴もいるもんじや。では」

ハレーは部屋を後にした。部屋の中にはミルキスが呼吸する音だけが響いていた。

ふと、あるものが目に留まった。ネンシーはそれが何か分からなかった。それも、目を凝らしてみると、何も無いからである。しかし、何と無く気になる。

やっとそれが何か分かった。それは、壁に開いた、つまようじで空けたかのような小さい穴だった。ネンシーはその穴をじつと見つめた。特に変わった所は無い。

皆さんは、火災警報器を押したことはあるだろうか。緊急時は別として、もしもそれがいたずらならば、そのすさまじい音に思わずびっくりしてしまっだろう　いや、私は押したことが無いが…

穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴
穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴
穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴
穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴
穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴穴

第十話：ミルキス、卒倒（後書き）

ややこしい謎を解明するのは皆さんにはお勧めできない。皆さんにはやはり、今分かつている単純明快な事実を目を向けて欲しい。特にミルキスの部屋の壁のような、ややこしいものには、精神衛生上関わらないほうがいいのだ。

第十一話：あの世からの来訪者

前回おかしな終わり方をしてしまい、心からお詫び申し上げます。しかしながら、あの「穴穴穴…」と言う穴だらけの文章は事実を表現しており、これから起こる事を忠実に表現している訳なので、悪しからず。

ネンシーはおもいきって指先で穴を触れると、すぐに異変に気付いた。つまようじの先で開けたような大きさからいきなり指一本分入るまでに大きくなったし、何よりも、部屋のあちこちで気味悪い音を立てながら同じ大きさの穴が開き始めたのである。四方八方の壁の上が穴で埋め尽くされると、穴はその増殖を止めた。しかし、良かったことに、一連の出来事にミルキスは完全に気付くことも無かったし、穴が開いたのは壁の上だけ。つまり、天井と床を除く部分。だった。ネンシーはミルキスが相変わらず寝ている。気絶している。のを確認して、ひとまず安心した。しかし、その穴の正体が分からない以上、完全に安心する事は無かった。

その時、ハレーが戻ってきた。彼は壁に空いたおびただしい数の穴に少々たじろいだが、次の瞬間、何故かネンシーに向かって微笑んだ。彼は水の入った桶やなにやらを床に置くと、壁の方に近づいた。

「これは何なの？」ネンシーは慌てて訊いた。「私はつい…」

しかし、ハレーは手を挙げ身振りでネンシーを遮った。

「でも…」

「いいんじゃない」ハレーは穴から視線を外さず答えた。「たいした事ではない」

「でも、これは何なの？」

「これはな、」ハレーはようやく視線を穴だらけの壁から外した。

「これはな、魔法の杖を保管するための穴じゃ」

ネンシーはきょとんとした。

「びつくりするのも無理は無い」ハレーはネンシーの気持ちを察した。「普段目にしないものじゃからな」

「でも、何でこんな所に……」

「泥棒とか、やんちゃな子供から守るためじゃ」ハレーは言った。

「普通の人間には気付かれない様に魔法がかかっつとるんじゃ」

「でも私は気付いたわ」ネンシーは言った。「その椅子に座つてて見えたもの」

「普通の人間」と言っただけじゃろう」ハレーは微笑んだ。「お前は普通じゃないのかもしれない　もちろん、良い意味でじゃ」

「普通じゃない……」ネンシーは確かに自分には剣術の才能があると知っていたし、それは紛れも無く事実であった。しかし、その他にも何か才能があるかと言うと、確証が持てなかったのだ。

「まあ、良いじゃろう」ハレーは視線を壁に戻した。「元に戻そう」「どうやって？」ネンシーは訊いた。「どうやって戻すの？」

「簡単じゃ。お前が最初に押した穴をもう一回押せばいいんじゃない」ハレーは自信満々に言った。しかし、ネンシーはそれに違和感を覚えたものの、気にしないことにした。実際、どうやって戻すか考える際に「最初の穴を押す」と言うアイデアが出てくるのが普通だし、ネンシーだってそうしただろう。しかし、ネンシーが違和感を覚えたのはそれではなく、そのハレーの「自信満々」な態度に対してである。この部屋にミルキスを運んでくる際もそうだったが、やたらとこの場所に詳しいのだから、ネンシーにとって不思議でならなかった。

ネンシーは最初に押したボタンに指を触れた。すると、その穴はたちまち元の小ささに戻り、他の穴は消えてなくなった。まるで何事も起きなかったかのように。

そして、二人はミルキスの方を見た。相変わらず、であった。

彼らはタオルを水に浸け、絞るとそのままミルキスの頭にのせた。

そして、ミルキスの上に布団を被せた。

「そう言えば、今は何時なの？」ネンシーは気になった。「地下だから、外が見えないわ」

「時計も無い」ハレーは困ったように言った。「どうやって時間を知るのじやろう」

「感覚だ」突然声がした。二人はどこから声が来たか分からず、辺りを見回した。

「今は夜中を少し過ぎたくらいだ」また声がした。そこでようやく二人はそれがミルキスの声であると気が付いた。ミルキスは相変わらず目をつぶっていたが、青ざめていたのが直っており、さらに呼吸も普通になっていた。

「大丈夫？」ネンシーは心配して訊いた。

「全く問題は無い」ミルキスは呟いた。

「そう：良かったわ」ネンシーも呟いた。

しかしハレーはずっと黙っていた。ネンシーはハレーをちらっと見た。

「ミルキス」ハレーはようやく喋りだした。「あれはわしではないのじゃ。分かってくれ」

「分かっている」ミルキスは目をつぶったままだった。「さっきは済まなかった」

「何の話？」ネンシーは二人が突然訳の分からないことを話し出したのにびっくりした。

「君にも言うべきだな」ミルキスは目を開けた。「良いだろう？ハレー」

「いいとも」ハレーはうなずいた。「良いじやろう」

「かつて、「ミルキスは起き上がり、おもむろに話し出した。」
剣と魔術の闘争」という名の戦争があったんだ　五年間続いたんだが　多くの犠牲者が出たんだ」

「でも、私は何も知らないわ」ネンシーは不思議そうに訊いた。「

そんなに重大なことなのに」

「そこじゃ」ハレーはミルキスの代わりに答えた。「そこが、重要な秘密なのじゃ」

「重要な秘密……？」

「そう」ミルキスが言った。「とっても重要なんだ。あの戦争はあまりにも悲惨だったんだ。だから、そういう嫌な記憶を封印することにしたんだ」

「封印？」そういう魔法用語に詳しくないネンシーは訊きかえした。「魔法の力で何かを押さえつける」という意味じゃ」ハレーが言った。

「しかし、あまりに多くの人々が戦争のことを知ってしまったていたんだ」ミルキスが後を継いだ。「君の言うとおり、重大なことだからな。だから、非常に大きな魔力が必要だったんだ」

ネンシーはミルキスの話に聞き入っていた。

「そこで、王が決断を下したんだ」ミルキスは言った。「異界の魔物を召喚する決断をね」

「異界の魔物……？」ネンシーはぎくりとした。同じことをミルキスに言われたことがある……

「奴」じゃ「ハレー」はぼそつと言った。「奴」をこの世に連れて来るように魔術師達に命令したんじゃない」

「親父のカルメンもその魔術師の一員だったのさ」ミルキスは言った。「そして、綿密に計画が立てられたんだ……何度も計画を練っては少しでも問題があったら最初からやり直したらしい」

「奴」は強力な存在じゃからな」ハレーは解説した。「少しの間違いが命取りになるんじゃない」

「そして」ミルキスは言った。「作戦が決行されたんだ。巨大な魔方阵が描かれ、8つの方角に最高の魔術師が配置された。親父は東の方角に居たらしいが」ミルキスは思い出すように言った。「他の人は絶対に近寄れないように厳重な警備がされていたんだ。そして、真夜中に、月が空のてっぺんに現れたとき、魔術師達はいっせ

いに呪文を唱えだした。すると……」ミルキスはネンシーを見据えた。
「真ん中から黒い物体が出現した。皆は毛むくじゃらで、やたらと
のつばな怪物を想像していたんだ。いや、実際、今まで召喚してき
た魔物は皆そうだった」

「どういう奴だったの？」ネンシーは好奇心から訊いた。

「普通の人間大だった」ミルキスは真剣な表情で答えた。「しかも、
毛むくじゃらじゃなかった。ただの真つ黒な影みたいなものだった
んだ」

「影……？」

「そうさ、影だ」ミルキスは微笑した。「影が立体的になっただけ
だ。実に予想外だった。しかし、魔術師は気を緩めず、呪縛の呪文
を唱え続けた。そして魔術師のリーダーが精神力で語りかけたんだ
しかし、”奴”はリーダーが送った精神力を簡単にはじき返し
た。そして、逆にリーダーに精神力で語りかけたんだ」ミルキスは
ハレーをちらつと見た。

「なんて語りかけたの？」ネンシーは訊いた。

「”神を信じるか？”」ミルキスは言った。「そしてリーダーは答
えたんだ。”もちろん信じる”とな。すると影は高笑いしてこう言
ったんだ　神は居るかもしれないし、居ないかも知れぬ。信じて
も良いし、信じなくても良いんだ！だがな　」

ネンシーはぎくりとした。ハレーに言われたのと同じことだ。

「だがな　悪魔は確実に居るのだ！そこら辺の暗がりにも、お前ら
の背後に、そして　」

第十一話：あの世からの来訪者（後書き）

ネンシー：今回も微妙な終わり方だったわね…

ハレー：それもそうじゃ。でも”奴”の来歴が分かってても、結局今”奴”がどこにいるのか分からのじゃ！

ミルキス：そう言えば、”奴”は随分と顔を出していないな。でも次話ではもしかしたら…？

あと、手紙を書いてくれた現さん、塚原宏樹さんには感謝するよ。他の皆も…

ネンシー：私にも！読ませて…って痛い！ハレー！何するのよ！

ハレー：お前にはまだ早い！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4919c/>

赤い双剣

2010年11月5日01時46分発行